フォースタス博士の damnation

——その決定的要因——

朱　雀　成　子

フォースタスが damnation を招いた決定的要因は何であろうか。彼が「半神」("demi-god") (i.61) になるために魔術を獲得し，悪魔に魂を売る契約をしたことは，神への重大な罪である。またその後24年間，種々の〈甘い快楽〉("sweet pleasure") (vi.25) に耽溺したことも，それ以上に深い罪と言えよう。フォースタス自身も，これらの外見上の罪のために自分は救われないと思い込む。

しかしながら，フォースタスが damnation に至る過程を見ると，彼が damnation を招く決定的要因は，フォースタスの心の中にあるのであって，上述の外見上の罪ではないことがわかる。つまり，神は魔術を行使した自分を愛してはいない，救ってはくれない，というフォースタスの〈神への絶望〉("Despair in God") (v. 5) が，救いを妨げるのである。

A. Sachs もフォースタスの damnation の原因を，神に対する彼の絶望的な態度である，と内的要因に帰している。しかし，Sachs はその〈神への絶望〉が劇以前，または劇が始まった時点において既に内在しており(1)，そのためにフォースタスは魂を売り，魔術を手がけるようになったのだと解釈している。即ち，劇の始めからフォースタスの damnation は予定されており，彼には自由意志 (free will) がなかった(3)と言っている。筆者は da-

(1) A. Sachs, "Th Religious Despair of Doctor Faustus, "*Journal of English and Germanic Philology*, LXIII (1964), p. 647.

(2) Sachs は "Faustus may well be predestined to be damned . . ." と述べている。*Ibid.*, p.637.

(3) *Ibid.*, p.646.

mnation の原因を内的要因に求める点では Sachs と同じであるが，その他の点では逆の意見である。つまりフォースタスの，神は自分を愛してはいない，という〈神への絶望〉は，劇の始めからあったのではなく，彼が魔術を行使する決心をした結果生じたものであり，それはやがて 5 場では〈不安〉を，6場では耐えきれないほどの〈絶望感〉を喚起する。これらの〈不安〉や〈絶望感〉のために，彼は自由意志を持ちながらも damnation を招くに至ったのである。なお，詳しくはⅢ章で述べるが，フォースタスの〈神への絶望〉を徹底的に認識させたものとして，6場のルーシファの登場は注目すべきである。

以下，フォースタスの damnation に至る過程を

Ⅰ　フォースタスが魂を売って，魔術を手がけるまで（1場～5場）

Ⅱ　魔術を獲得したものの喜べず，〈絶望感〉に襲われてキリストの名を呼ぶまで（6場～6場前半）

Ⅲ　ルーシファの登場により，フォースタスはルーシファの世界に入る決断をし，以後24年間〈甘い快楽〉に溺れる（6場後半～17場）

Ⅳ　老人が登場してフォースタスを悔悟させようとするが，彼は今さら神の救いを信じられず，ついに damnation に至る（18場～20場）

に区分して，その決定的要因を詳しく見ていこう。

Ⅰ

フォースタスは5場において「神は自分を愛してはいない」と端的に〈神への絶望〉を表明する。この〈神への絶望〉は Sachs の言うように，劇の始めから彼の心に内在していたのであろうか。われわれはまず5場以前のフォースタスの神に対する考えを見よう。

1場のフォースタスは「学位を得たからには，うわべは聖職者らしくするがいい」(“Having commenc'd, be a divine in show”) (i.3) という言葉からわかるように，神に対して敬虔な信仰を抱いていたとは言えない。メフィストフィリスを初めて呼び出した3場でも同様で，彼は天国と地獄の区

別はないと言ったり，〈天国の喜び〉("the joys of heaven") (iii. 86) を失って悲嘆しているメフィストフィリスに〈天国の喜び〉など軽蔑するようにと豪語するのである。以上のように1場及び3場におけるフォースタスの言葉に，われわれは神に対する不遜といったものさえ感じるのである。だが彼はこのような時でさえ〈神への絶望〉という状態を経験してはいない。5場以前のフォースタスが少くとも〈天国の喜び〉にあずかり，心の平安を保持していたことは，彼が6場でメフィストフィリスに「おまえが天国の喜びを奪った」("thou hast depriv'd me of those joys.") (vi.3) と呪っていることからも明白である。つまり5場以前の彼が神に対して暴言とも言えるような言葉を平気で言えるのは，彼がまだ神の御手の内にあるため，〈天国の喜び〉が無くなった状況を経験してないからだと言える。彼が魔術をやろうと決心したのも，〈神への絶望〉が初めから彼に内在していたからではなく，魔術を駆使して「半神」になり，この世の精神的，物質的，肉体的な〈甘い快楽〉を経験したい (i. 52–62) と熱望したからであろう。神から離れた苦しさをいまだ知らない彼は，魔術のためなら神を捨てることも意に介さないほど強気である。

だが神に対する彼のこの不遜な態度も，〈神への絶望〉が意識されはじめる5場からは，少しずつ影をひそめる。魂を売る条件をメフィストフィリスに伝え，ルーシファからの返事を待っている5場の初めで，それまでのフォースタスの神に対する態度からは想像できないことであるが，彼はともすれば神や天国のことを考えている自分を発見する(v.3)。彼は何とか神のことを考えまいとして「神に望みをかけずにベルゼバブを信頼しろ」("Despair in God, and trust in Beelzebub.") (v.5)とベルゼバブ（従ってルーシファやメフィストフィリス）に少々疑いを抱き，前進できなくなっている弱気の自分を叱咤するのである。しかしフォースタスの自己への叱咤激励にもかかわらず，彼の耳には「魔術を捨て，再び神のもとに戻れ」("Abjure this magic, turn to God again!") (v.8)という良心の声が聞こえてくるのである。ここに至って彼は本気で神の下に帰ろうとする

Ay, and Faustus will turn to God again. (v.9)

だがフォースタスはこの God という言葉に今までと異なった感じを受けたのが，改めて「神の下へ？」(“To God”) (V. 10) と反復する。この時彼の口をついて「神はおまえを愛してはいない」(“He loves thee not.”) (v. 10) という言葉が出てくる。彼は魔術を捨てて神の下に帰ろうとした時に，神が昔の神でないことに気づく。神はもはや彼を愛してはいないのである。変ったのは彼の方であるが，彼には神の方が変ったように思える。フォースタスの〈神への絶望〉はこうして彼が自分の決心に迷いを覚え始めた5場から意識される。フォースタスは〈甘い快楽〉を求めて魔術をやることにしたが，それは〈甘い快楽〉を約束したものの，フォースタスの予期しなかった〈神への絶望〉をも彼に植えつけてしまったのである。こうして彼は，今となってはもう愛されてはいないのだから，と神の下に戻るのをきっぱりと断念し魔術を行なう決心をする。

しかしながら，その彼の決心にもかかわらず数10行後の契約の場面で再度迷いが生じる。彼は自分の腕に「人間よ，逃れよ」(“*Homo fuge*!”) (v. 77) という文字を見る。これは善がフォースタスに警告を発したとも考えられそうだが，その文字が彼の目に消えたり現われたりすることを考えると，フォースタス自身の心の迷いからこの文字が見えたのだと解した方が適切であろう。彼はここで魔術を捨て，悔悟しうる二度目の機会を持つ。だが彼は神の下へ逃げようと思った時

If unto God, he'll throw me down to hell. (v. 78)

と極論してしまう。これは前述の “To God? He loves thee not.” と類似したパターンである。「人間よ，逃れよ」という文字を見て神の下に逃げようと思ったにもかかわらず，〈神への絶望〉という壁に突き当ったフォースタスは，前の時と同様，さほど動揺もせずに前進することを決心し，契約証書をメフィストフィリスに与える。

以上のようにフォースタスは5場で二度も「神の下に戻れ」という声を聞いたり，文字を見たりしていながら，〈神への絶望〉を意識して神の下に戻るのをあきらめ，前進しようとする。この二つの場面に共通していることは，これらの場面でのフォースタスには魔術への好奇心も手伝ってか

〈神への絶望〉はあっても，後に6場で見るような〈絶望感〉はないことである。

しかし〈神への絶望〉は5場のフォースタスの心にもやはり多少の影響を及ぼし，〈不安〉の影を落しているように思える。というのは彼は魔術を行使できるようになると，それまで熱望していた「名誉」("honour") (v.22) や「富」 ("wealth") (v.23) よりまず最初に妻を欲するのである。彼はその理由として自分が「浮気っぽい」 ("wanton") (v.142) で「多情な」 ("lascivious") (v.142) だから〈妻〉なしでは生きられないと言うのであるが，であれば魔術をやるまでの数十年間というもの，彼は〈妻〉なしで生活してきたのか，また "wanton" で "lascivious" なら〈妻〉でなくとも女性であればよい筈である。正当な結婚—これは神に通じる—という手続きを踏んだ〈妻〉を悪魔のメフィストフィリスは絶対に出したがらない。がフォースタスは「親愛なるメフィストフィリス，おれに妻をつれてきてくれ。どうしても欲しいんだから。」("Nay, sweet Mephostophilis, fetch me one, for I will have one.") (v.145–146)と執拗なまでに求める。彼が〈妻〉を求めたのは肉体的理由というより精神的理由，即ち心の支えを必要としているからではなかろうか。そして彼が心の支えを求める理由は，地獄を信じないと言いながらも，魂を売ったため地獄に落されるかもしれないこと，そしてその時神は自分を救ってはくれないだろうという〈神への絶望〉から生じる〈不安〉があるからではなかろうか。だがこの〈不安〉は契約完了後，フォースタスがメフィストフィリスを相手に3場の時のように「地獄などというものはお伽話にすぎない」 (". . . . hell's a fable.") (v. 128) とか「死んだ後でもまだ苦しみがあると考えるほどフォースタスはばかだとおまえは思っているのか」 ("Think'st thou that Faustus is so fond to imagine/That after this life there is any pain?") (v.134–135) と豪語するのと矛盾するように思える。しかしこの時のフォースタスの心境は3場の時と同様とは言えない。なぜなら3場のフォースタスは〈神への絶望〉を知らなかったが5場では意識しているからだ。つまり3場ではいざとなれば神は救いの手をさし伸べてくれるという甘い考えがある。が5場では魂

を売ってまで魔術を行なうことにした自分を，神はもう救ってはくれないと思っている。したがって3場と一見同じに見える5場のこの高言も，そのような〈不安〉を追い払おうとする彼の強がりと解釈できるのである。この〈神への絶望〉に起因する〈不安〉解消のため，彼は〈妻〉という心の支えを何よりも最初に求めたのではなかろうか。

II

〈神への絶望〉は5場では〈不安〉を生む程度であったが，5場から6場の間にそれは〈不安〉以上のもの，即ち〈絶望感〉を生む。われわれは6場のフォースタスが既に〈絶望感〉に陥っていることを「甘い快楽が深い絶望を忘れさせてくれなかったら，とっくの昔に自殺して果てる筈だった」("And long ere this I should have done the deed/Had not sweet pleasure conquer'd deep despair.") (vi. 24–25)
という言葉から知るのである。フォースタス自身もこの6場前半で，自分がこのような〈絶望感〉に苦しむのは〈天国の喜び〉を欠いているからだと気づく。

> When I behold the heavens, then I repent
> And curse thee, wicked Mephostophilis,
> Because thou hast depriv'd me of those joys. (vi.1–3)

彼はここで始めて〈天国の喜び〉が魔術の与えてくれる〈甘い快楽〉より重要であること，またそれ無しで生きる苦しさを痛感する。彼はこの〈絶望感〉から抜け出すために魔術を，つまり彼の本来の目的であった〈甘い快楽〉を捨ててでも〈天国の喜び〉を取り戻そうとする。

> I will renounce this magic and repent. (vi. 11)

こうして〈絶望感〉はかえって彼を悔悟へ向けさせるのである。

この6場のフォースタスの態度は5場の，神は所詮自分を愛していないのだから，と神の下に戻るのをあっさりと断念し，魔術を続けていった態度と対照的である。ここでフォースタスの気持を鼓舞するかのように善天

使が，また彼の〈神への絶望〉を思い出させるかのように悪天使が登場する。

Good Ang. Faustus, repent; yet God will pity thee.

Bad Ang. Thou art a spirit; God cannot pity thee. (vi.12–3)

フォースタスは悪天使の「おまえは悪魔だ」という声を聞いても必死でそれに抵抗し

Be I a devil, yet God may pity me;

Yea, God will *pity* me if I repent. (vi. 15–6)

と一縷の望みを持って神にすがろうとする。神は自分を愛していないと思っているフォースタスが，ここで初めて（また唯一の箇所であるが）pityという語を用いたことは注目に価する。彼は今や一時的に〈神への絶望〉を忘れて，神のpityを信じる気持になっている。しかし悪天使の「だがフォースタスは決して悔悟しないだろう」("Ay, but Faustus never shall repent.") (vi. 17) という言葉を聞くと，彼の心はかたくなになり悔悟できなくなってしまう。そして彼の耳には「フォースタス，おまえは呪われている」("Faustus, thou art damn'd!") (vi.21)という言葉が聞こえ，〈神への絶望〉が再び彼を襲う。5場のフォースタスはその言葉を聞いても〈不安〉を感じる程度であったが，この6場前半では「恐ろしい声が耳もとでなり響く」("...fearful echoes thunders in mine ears,") (vi,20) と言って恐れる。やがて彼の眼前には「剣」("swords") (vi.22)，「毒」("poison") (vi. 22)，「首つり縄」("halters") (vi.22) などが見えてくるが，これらはおそらくフォースタスの，自分は呪われている，という強迫観念の産物であり，しかも中世道徳劇の Despair の中には咽に sword を当てていた[4]ものもあることを思えば，彼の〈絶望感〉を如実に示すものと言えよう。

さてこのような〈絶望感〉の中で，フォースタスは今まで楽しんできた〈甘い快楽〉を思い出す。そしてその〈甘い快楽〉を一つ一つ列挙するうちに，彼は次第に元気を取り戻してくる。だがフォースタスがここで挙げる〈甘い快楽〉とはどのようなものであろか。それは彼が魔術を手がける前に計画していた大規模なものでも，また後に見るような愚行でもなく，

(4) *Ibid*., p. 626.

盲目のHomerにAlexanderの恋やOenonの死を吟誦させたり(vi.26-27), テーベの城を築いたAmphionに魅惑的な琴をひかせメフィストフィリスと合奏させた(vi.28-30)ことなのである。要するに彼が求めたものは，これらの吟誦や美しい音楽という人の心を慰め癒すものである。以上のことから，フォースタスの本来の目的は〈甘い快楽〉であったのに　彼は〈甘い快楽〉をそのもの自身として楽しんでいたのではなく，〈絶望感〉を紛らす手段として味わっていたことがわかる。そして今もまたフォースタスは過去の心慰められる〈甘い快楽〉を想起することで，彼に内在する〈絶望感〉に目をつぶろうとしている。

Why should I die, then, or basely despair?
I am resolv'd Fanstus shall not repent. (vi. 31–2)

こうして彼はもう悔悟しないと堅く決心するのである。

さて〈甘い快楽〉が〈絶望感〉を克服してくれるからと考えて，気を取り直したフォースタスは，すぐにメフィストフィリスと天文学上の問題を議論し始める(vi. 33-34)。しかし神への望みは抑え難いのか，わずか数十行後にフォースタスは　その答を知りながら，メフィストフィリスに「世界を作ったのは誰か」("...who made the world.") (vi. 69)と聞く。彼はメフィストフィリスの「おまえは呪われているのだ。だから地獄のことを考えるのだ」("Thou art damn'd; think thou of hell.")(vi. 75)という言葉にも惑わされず

Think, Faustus, upon God, that made the world. (vi.76)

ときっぱり言い切る。6場前半で「おまえは呪われている」(vi.21)という言葉を聞き，恐れおののいていた彼に，どうしてこのような勇気が芽生えてきたのであろうか。それは彼の〈絶望感〉が非常に深く，ほとんど極限状態にまで達しており，この苦しい〈絶望感〉から抜け出すということ以外，彼には何も考える余裕が無いからだと言えよう。この時，悪天使と善天使が登場する。

Bad Ang. If thou repent, devils will tear thee in pieces.
Good Ang. Repent, and they shall never raze thy skin. (vi. 83–4)

フォースタスは今まで，5場と6場前半の二度とも，悪天使の言葉に従ってきたが，〈絶望感〉から抜け出すために神の下に帰りたい一心なのか，ここで初めて善天使の言葉を受け入れることができる。つまり彼はキリストを自己の救い主として，その名を夢中で呼ぶ。

O Christ, my saviour, my saviour,
Help to save distressed Faustus' soul. (vi. 85–6)

〈神への絶望〉の状態にあって神は自分を愛していないと考えていたフォースタスは，今まで神やキリストの救いを求めたいことは無かったのに，ここで彼が自発的にキリストの名を呼び救いを求めたこと，また上の例文の86行，及びその数行前で彼が口にする 'distressed Faustus soul'(5) という言葉から，この時の彼の〈絶望感〉がいかに深いものであるかが窺える。

III

キリストの名を呼んで〈神への絶望〉の状態から抜け出そうとしたフォースタスは救済への第一歩を踏み出す。ところが彼の呼びかけに応じたのはキリストではなくルーシファであった。危機を察したルーシファはメフィストフィリス一人では危いと見たのか，ベルゼバブと共に現われ，

Christ cannot save thy soul, for he is just; (vi.87)

とフォースタスに畳み掛けるように言う。つまり神は正しい方だから，魂を売って魔術をやったようなフォースタスを救わないというわけである。フォースタスにしてみれば，魔術を手がけた自分を神は救ってはくれない，という〈神への絶望〉を抱いてきた。一時的にこの〈神への絶望〉を忘れ，キリストを呼んだフォースタスに，ルーシファは再びそれを認識させることで，フォースタスをキリストから離すことに成功する。更にフォースタスの〈神への絶望〉を徹底的に認識させたのは神の沈黙と悪魔の出現である。救いを求めるフォースタスの前に地獄の王者であるルーシファ

(5) 数行前では次のように使われる。
'Tis thou hast damn'd distressed Faustus' soul. (vi.79)

やベルゼバブが出てきたこと，そしてその時神が何らフォースタスに働きかけなかったことは，彼の〈神への絶望〉を決定的にしたのではなかろうか。ルーシファの登場は，フォースタスがこの後24年間も〈甘い快楽〉に溺れ，結局悔い改められなかったことを思えば，序で述べたように非常に重要な意味を持っている。

こうしてルーシファの登場により天国への望みを完全に断ち切られたと感じたフォースタスは，今までのように〈神への絶望〉から〈絶望感〉に走るのではなく，〈甘い快楽〉を徹底的に楽しもうという決断をする。この悔悟と正反対の道は　彼にとって〈絶望感〉から抜け出すいま一つの道であった。彼はルーシファ登場前までは〈甘い快楽〉を純粋に喜べず，それはむしろ〈絶望感〉を癒すためのものであったが，この時から〈甘い快楽〉に没頭していく心構えができるのである。従ってルーシファやベルゼバブが彼に七大罪悪を見せると言った時には

> That sight will be as pleasant to me as paradise was to Adam the first day of his creation. (vi.108–9)

と言って喜び，それを見終えた時も「まったく魂がぞくぞくするほどこの見世物は面白かった」（"O, how this sight doth delight my soul!") (vi. 170) と感嘆する。フォースタスはルーシファが登場するまでは，今まで見てきたように何度か悔悟しようとし，神と悪魔の間をさ迷っていた。しかしルーシファが登場してからは，ルーシファの世界に入る決断をし，悪の深みに陥っていく。この七大罪悪は彼を神から離し，ルーシファの世界へと奥深く導いていく儀式のような役割を果たしているのである。

フォースタスは七大罪悪の後には地獄を見たいと切望し　更にメフィストフィリスに「おまえは私を喜ばせてくれる。私がこの世にいる間，およそ人の心を楽しませうる快楽という快楽で，私の心を飽きるほど楽しませてくれ」("...thou pleasest me:/Whilst I am here on earth let me be cloy'd/With all things that delight the heart of man.") (viii. 58–60) と言って，８場から18場迄（正確には老人の登場前まで）のほぼ24年間というもの大小様々の冒険や奇蹟，また愚行を行う。この間，ルーシファによって

一段と深く〈神への絶望〉を認識させられたにもかかわらず〈絶望感〉や〈不安〉は無い。ただ24年も終りに近づいた15場で突然〈絶望感〉が生じる。

What art thou, Faustus, but a man condemn'd to die?
Thy fatal time draws to a final end;
Despair doth drive distrust into my thoughts. (XV. 21–3)

彼は眠ることでこの〈絶望感〉を抹殺しようとするが，突然十字架上のキリストに言及し

Christ did call the thief upon the cross;
Then rest thee, Faustus, quiet in conceit. (XV. 25–6)

と言って安堵してしまう。フォースタスは本当にここで自分の罪が盗賊と同程度，あるいはもっと軽いと思い，キリストの救いを信じたのであろうか。彼は24年前でさえ，5場や6場で見たように，神は自分を救ってくれないという〈神への絶望〉を感じていた。ましてこの24年近く快楽に耽溺していた彼が，ここでその罪を盗賊と同程度または軽いと思ったとは考えられない。しかも聖書によれば盗賊がキリストに救いを求めたからキリストは手を差し伸べたのであり，聖書に詳しいフォースタスがここで自分からキリストを求めず，キリストが手を差し伸べてくれると言うのも解し難い。このフォースタスの言葉は，実はフォースタスが自分自身を欺き，現実の自分の姿を直視するのを逃避した言葉と取るべきではなかろうか。彼にとって24年間も〈甘い快楽〉に溺れてきた現実の自分の姿を直視するのは，耐えがたい苦痛である。彼はこれから逃れるために，自分は盗賊のような卑しい行為はしていないのだ，と言い聞かせることによって，〈神への絶望〉を抑圧し，更には〈絶望感〉を忘れようとしたのだと言えるであろう。

IV

こうして彼はまたもや魔術を続けていき，約束の期限が迫った18場でも学者たちの要望に応じてヘレンを見せるなどしている。この時，老人が登

場する。彼はフォースタスがいまだ「神の愛にふさわしい魂」("amiable soul") (xviii.43) を持っていることを告げ，魔術を捨て悔悟するようにと勤める。老人のこの訓戒を聞いたフォースタスは，24年間の眠りから覚めたように，自分が今どのような立場にあるのか，また今まで何をやってきたのか (xviii.55) を改めて自己に問う。それから彼は

Damn'd art thous, Faustus, damn'd; despair and die. (xviii.56)

と絶望して叫ぶ。この言葉はフォースタスが24年近く〈甘い快楽〉に溺れていた間，一度も（15場においてさえも）聞かれなかった。この「おまえは呪われている」という言葉は，かつて6場のフォースタスの耳に聞こえていた言葉で，それを彼が今，口にするのは，彼がその時の〈神への絶望〉をまざまざと思い出したからであろう。老人のフォースタスへの励ましの言葉は，結局彼を喜ばすどころか皮肉にも〈神への絶望〉，そしてそれに伴って〈絶望感〉を喚起してしまった。しかも18場の〈神への絶望〉と〈絶望感〉は6場のそれよりはるかに重くなっているのである。なぜなら彼は24年もの間，日々あらゆる快楽を積み重ねてきたわけで，老人が彼にその罪を直視させ，悔悟させようとした時，24年の〈甘い快楽〉は余りにも重く彼の肩にのしかかり，彼を〈絶望感〉に陥らせるのである。注目すべきことはII章で見たように，6場の〈絶望感〉は彼に苦しみのあまり神を求めさせたが，18場のそれは余りに深く，彼に悔悟の心を起させるどころか，自殺への願望を喚起するということである。自殺はメフィストフィリスの勝利を意味するので，老人は彼を制し，天使がいまだ彼の頭上にいること，そして神の恵みを注ごうとしていることを告げ (xviii. 60–63)，「神の慈悲を求め，絶望から逃げるのだ」("...call for mercy, and avoid despair.") (xviii. 64) と忠告する。しかし老人の熱意あふれる優しい言葉も，24年間も楽しんできた今となっては，とうてい神は救ってはくれまい，また救いを頼めもしない，と思うフォースタスにとっては単なる慰めでしかない。

Thy words to *comfort* my distressed soul. (xviii. 66) （イタリックは筆者）

それでも彼は自己の罪を考えようと，自分一人にしてくれるように老人に頼む (xviii.67)。だが老人が去り一人になったフォースタスは，自分の犯した罪の重さゆえに

Accursed Faustus, where is mercy now?
I do repent, and yet I do despair; (xviii. 70–1)

と言って苦悩する。この言葉には今となっては神の慈悲が信じられず，絶望せざるを得ないフォースタスの，どうにもならないほど深い〈神への絶望〉が滲み出ている。

だがフォースタスは神は救済してはくれないと痛感しながらも，何とか他の方法でルーシファの死の罠を逃れる手だてはないものかと苦悶する。

What shall I do to shun the snares of death? (xviii. 73)

メフィストフィリスはフォースタスのこのような思いを砕こうと激しく怒る。

Thou traitor, Faustus, I arrest thy soul
For disobedience to my sovereign lord:
Revolt, or I'll in piecemeal tear thy flesh. (xviii. 74–6)

このメフィストフィリスの怒りは，6場でフォースタスがキリストの名を呼んだ時ルーシファやベルゼバブが彼を激しく非難したのに対して，メフィストフィリスがほとんど彼を責めなかったのと対照的である。メフィストフィリスがここで初めてフォースタスのルーシファへの背信をなじり，怒りを爆発させたことは，フォースタスがそのように非難されても仕方の無い程メフィストフィリスを従者として〈甘い快楽〉を満喫してきたことを示す，と考えるべきであろう。彼はメフィストフィリスの断固とした言葉を聞くや否や，すぐさま自分の非を詫びる。

I do repent I e'er offeneded him.
Sweet Mephostophilis, entreat thy lord.
To pardon my unjust presumption, (xviii. 77–9)

ここで77行のフォースタスの言葉を吟味してみよう。repent は6行前では "I do repent, and yet I do despair." (xviii. 71) と神に対して使ったのに，ここではルーシファに対して用いられており，また offended は老人によっ

て "...thou hast now offended like a man." (xviii. 41) のように人間が神に対して罪を犯すという意味で使われているが，フォースタスはここで神にでなく，ルーシファに対して罪を犯すという意味で用いている。つまり24年間の快楽を終えようとしている今，フォースタスが悔悟できるのは神にではなくルーシァに対してであり，彼は神に対する悔悟も許されないほどの状態なのである。更に79行の unjust presumption も，彼は1場や3場では神に対して暴言を吐くなど〈傲慢さ〉，即ち presumption を抱いてきたのであるが，24年近くもルーシファの領域内で魔術を行ってきた今となっては，彼がルーシファを離れること自体が契約違反にもなり unjust presumption と見えるのである。要するに24年を経過した18場のフォースタスはメフィストフィリスの怒りを正当視せざるを得なくなっているのである。

こうして神の救いを完全に諦めたフォースタスは再びルーシファとの契約を守っていこうとするが，「死の罠」("snares of death") (xviii. 73)を逃れたい気持はただでさえある。彼は老人の説得を恐れ，老人に肉体的苦痛を加えるようにとメフィストフィリスに頼む。更にはルーシファとの契約を破らないで済むようにヘレンを「愛人」("paramour") (xviii. 92) として求める。メフィストフィリスはかつて5場でフォースタスから妻をほしいと懇願され，結局は悪魔を出してフォースタスの望みを阻止した。がここでは愛人としてのヘレンを快よく出してやる(xviii. 97–98)。ここでフォースタスのヘレンへの態度，およびヘレンのフォースタスへの影響を見よう。

ヘレンの姿を見たフォースタスは

Sweet Helen, make me immortal with a kiss. (xviii. 101)

と言って余命いくばくもない自分と，その美によって immortal であるヘレンとの同化を計ろうとする。ヘレンからのキスを受け彼女との自己同化を果したフォースタスは，今度は「ヘレンの唇に天国がある」("...heaven is in these lips.") (xviii. 104) と思うことで，彼の手にもはや届かなくなった天国への願望を成就する。この時老人が再登場し，沈黙のうちに成り行きを眺める。がフォースタスは自分をヘレンの愛人 Paris に見たて，老人

もフォースタスの救いを断念する(xviii. 119–121)程に彼女の美を絶賛し，この彼女が自分の愛人だ(xviii. 106–107)と思い込むことで恍惚としている。

以上の様にヘレンはフォースタスの心を陶酔させ，彼が深い〈神への絶望〉を意識しているにもかかわらず，彼の〈絶望感〉を忘れさせ，代りに〈甘い快楽〉を与えている。こうしてヘレンに夢中になって悔悟の気持すら無いフォースタスに天国の門は閉ざされる(xviii. 119–121)。W.W. Greg はメフィストフィリスの出したヘレンは spirit, 即ち悪魔で，フォースタスはヘレンを抱くことで悪魔と bodily intercourse をしたのだ[6]と述べている。ヘレンを悪魔と考えないまでも確かに彼女はフォースタスに一時的快楽を与えることで，彼から天国の祝福を奪い，悪に一役買っている。

さてフォースタスが老人の登場を契機としてヘレンを求めた状況は，6場でルーシファの登場をきっかけにフォースタスが24年間の〈甘い快楽〉に耽溺した状況と類似している。この二つの場面に共通することは，厭でも認めざるを得ない〈神への絶望〉を逃れるために，彼が永遠の魂のことを考えずに，刹那的な〈甘い快楽〉に溺れたことである。こうして24年前と同じ過ち，否，ヘレンの登場で彼に救いの可能性が無くなったことを思えば，それ以上の大きな過ちを犯したのである。

ヘレンという一時的快楽も無くなった19場のフォースタスには，善天使と悪天使による死の宣告が待ち受けているだけである。フォースタスは死の恐怖で「狂乱状態」("desperate lunacy") (xix.11) になりながら，ついに damnation に至るのである。

フォースタスが damnation を招いたのは，彼が魂を売って魔術を行使し，24年間〈甘い快楽〉に耽溺したという外的要因のためではなく，むしろ内的要因のためである。神の側からすれば，そのような罪人にこそ救いの機会を与えるのであるが，フォースタスは，魂を売り，24年間もさんざん好きなことをやった自分を神は愛していないし救ってもくれない，と思

(6) W.W. Greg, "The Damnation of Faustus, "*Marlowe* ed. Clifford Leech (Prentice-Hall, Inc. 1964), pp. 105–106.

い込んでいる。この〈神への絶望〉こそ彼に神の永遠の愛と救いを信じなくさせ〈絶望感〉を喚起させ，ついには damnation に至らしめた決定的要因と言えよう。

註　テキストは Christopher Marlowe, *Doctor Faustus*, ed. John D. Jump(London, 1972) を使用した。

参 考 文 献

Boas, Frederick S. *Christopher Marlowe*. Oxford: At the Clarendon Press,1940.

Cole, Doughlas. "The Nature of Faustus' Fall," *Doctor Faustus* edited by Willard Farnham. London: Prentice-Hall Inc., 1969.

Gardner, Helen. "The Damnation of Faustus," *Doctor Faustus* edited by Willard Farnham. London: Prentice-Hall Inc., 1969.

Greg, W.W. "The Damnation of Faustus," *Marlowe* edited by Cliffrord Leech. Prentice-Hall Inc., 1964.

Kirschbaum, Leo. "Religious Values in *Doctor Faustus*," *Doctor Faustus* edited by Willard Farnham. London: Prentice-Hall Inc., 1969.

Kocher, Paul H. "Marlowe's Atheist Lecture," *Marlowe* edited by Clifford Leech. Prentice-Hall Inc., 1964.

Sachs, A. "The Religious Despair of Doctor Faustus," *JEGP*, LXIII (1964), 625–47.

Snyder, Susan. "Marlowe's *Doctor Faustus* as an Inverted Saint's Life," *SP*, LXIII (1966), 565–77.

Wilson, F.P. *Marlowe and the Early Shakespeare*. Oxford; At the Clarendon Press, 1951.